『発見の一瞬』について

天草二

まずは、天城一の紹介から。２００４年、２００５年と立て続けに2冊の作品集が上梓された。１つは、『天城一の密室犯罪学教程』（この中には、摩耶正シリーズ全短編収録）。もう1つは、『島崎警部のアリバイ事件簿』。一時は幻の探偵作家だと言われていました。実際、その作品を読もうとすると、様々なアンソロジーの中にしか作品がなく、網羅的に読むことは不可能でした。それが、この2冊により、長編を除く多くの中短編を読むことができるようになりました。ファンの一人としては、うれしい限りです。さて、処女作「不思議の国の犯罪」が、旧「宝石」誌に載ったのが、昭和２２年春です。その作風は、鮎川哲也の言葉を借りれば、きわめて異色に富むもので、チェスタートン風のパラドックスを主役探偵の摩耶正が振り回すうちに奇妙な密室殺人が自ずと解けてしまうという形式をとっています。この摩耶正シリーズは、『天城一の密室犯罪学教程』で十分に堪能できます。昭和２９年「明日のための犯罪」を書いた後、突然筆を折りました。本業の数学の仕事に専念したためと云われています。昭和５０年代に入り、一転して、鉄道アリバイ物の「急行さんべ」で再登場します。初期の作風とがらりと変わり、アリバイ物が中心となり、摩耶の出番は少ない。島崎警部のアリバイ物は『島崎警部のアリバイ事件簿』で、しっかり読めます。そこで、少しでも、天城作品の魅力について語ってみようというわけです。

『Density can wait』という長編があります。こちらは恐らく幻の長編になってしまうでしょうが、この作品が表題の「発見の一瞬」のもとになりました。

この作品のあとがきで天城は次のように述べています。

『探偵を演じる島崎と犯罪の関係は、作者が数学に対する関係をパラフレーズしていることを極めて明白に表しています。学問の研究で一番神秘的と思われるのは、発見の一瞬でしょう。アルキメデスのエピソードが示しているように、その瞬間は戦慄的な感動を伴います。しかし、これを文学的に表現するのは至難で、ファウストの書斎の場で地霊と交わる場が僅かに片鱗を留めているといえましょうか。この困難に正面から取り組んだのは若気の過ち、第９章の苦戦が証しするかと存じます。ファウストの絶望を招くように、発見は自己嫌悪の危機を招きます。外的に表現されますが、本質的には内面で起こることです。』

「発見の一瞬を文学的に表現する」とは、どういうことでしょうか。ここで、わき道にそれることになり

ますが、他の作品の「発見の一瞬」の場面を挙げることで、天城が述べようとした「発見の一瞬」がどのようなものかを理解してみることにしましょう。

まずは、柄刀一の「光る棺の中の白骨」（本格ミステリ０５）。普通、密室の解明は、なおざりなことが多い。今更、カーの密室講座のおさらいでもないし、江戸川乱歩の類別トリックでもないだろう。ということで、状況の説明をしたならば、あとは、犯人を捕まえて犯行方法を教えてもらえればいいとか、まあ密室はいずれ解かれるだろう、とかいうタイプが多い。しかし、この作品は、ほとんど自明な犯行状況にもかかわらず、次々と新手の密室トリック解明を考え出すのです。登場人物たちが頭をいろいろに悩ませる、そのおかげで、益々密室は強固に不可能な状況に私たちを誘います。この作品は、その様子だけでも、読む価値があろうというもの。しかし、それだけの工夫が解明される過程で凝らされているのに、最後の場面に至って、主人公の探偵が一言、次のように言います。

（P３３０）　美希風の顔に目をやって、高部はそのまま身動きをやめた。美希風の双眸に今までと違う光があったからだ。はっきりとなにかを見通した目だった。

「犯人がなにをしていたか、つかめた気がするよ。」

と言って、後は解決篇になだれ込みます。ずうーと二人で議論をし、何とか密室を解明しようとし、これこそが解答だと思ったことも何度かあった。しかし、そのたびに、関係者の回答によりそれはありえないと否定されてきていた。その最後の、かなり煮詰まった場面であります。一体、どのような天啓が、探偵の脳裏に閃いたのでしょうか。一体、美希風は、どのようなことからその密室トリックを見破ったのか。これでは、まったく分かりません。探偵の中で、ある考えが浮かび、それが明確な像になった時、「犯人がなにをしていたか、つかめた気がするよ」という発言になったと思うわけです。その様子は、どこからきているのか、まったくわかりません。天城が言う「発見の一瞬」とは、まさに、この場面を示しているものと思います。そして、「発見の一瞬を文学的に表現する」とは、探偵に天啓が訪れた、まさにそのときの過程をどのように文学として表現するのかということだと思います。巷では、「天啓」の代わりに、「セレンデピテー」とも言われています。「偶然性」とも訳されます。普通に考えて，名探偵の推理のありようを私たち普通の人が普通にトレースできたら、それは名探偵の名に値しないでしょう。アガサ・クリスティのポワロにしても、「なに、注意深い観察力と灰色の脳細胞を駆使すれば、謎は自ずと解かれるのだよ」と言っても，私たちにはまったくなすすべもありません。ポワロが、気づくその一瞬は分かりません。従って，名探偵の登場する、たいていの作

品はそこに重点を置きません。それよりも、トリックの扱いに重点に置かれます。逆に言うと、推理作家は、そのロジックに安住して、まさに「発見の一瞬」が訪れるそのときを表現する在り方を書かないできたともいえると思います。ただ、天城一にしても、そのことの表現は、さすがに摩耶正シリーズでは不可能なようで、後期の島崎物でそのことをいくつか試みています。『Density can wait』では、どのような人物配置をしているのか。ホームズとワトソンでは、今言った『天啓』の訪れる場面を書く訳にはいきません。ホームズの推理のありようは、私たちには窺い知れません。それは神の領域です。島崎に対して、作者の用意した人物は実に意外な人物です。それは作品の内容に立ち入らねばならないので、ここでは深く述べませんが、作者の苦闘が実によく現われています。そこで、私が気に入っているその場面を述べた作品を幾つか列挙することにします。

『島崎警部のアリバイ事件簿』の中に、「春嵐」「ヴァンパイヤ」の二篇があります。「ちらの作品も、後半切れ味鋭い会話の連続になります。その中で、最後に至って、島崎と共に私たちは事件の解決を共有することができます。まさに島崎の上に「天啓」が降り立つ一瞬を経験することになるのです。思わず、ぞくぞくする瞬間です。「寝台急行《月光》」も、最後に同じ感覚を共有することができます。

最後に、せっかく、『Density can wait』を紹介したので、その密室トリックについて一言。この作品も、密室の舞台はほとんど自明な状況になっていて、読者が何かを考える余地をあまり残していません。島崎も密室についてはあまり言及しません。しかし、最後に解き明かされるトリックの切れ味鋭さはどうでしょうか。あまりの簡潔さに、思わず本を取り落とすこと必定です。解決がくどくど述べられたら興ざめですが、この作品はほぼ一言で犯行方法を明らかにしている点でも、その構成のシンプルさからも、一級の作品といえると思います。すぐ、その問題の場面を読み返したくなります。うーんと唸ります。最近、ポール・アルテの「第四の扉」「死が招く」を読みました。これらの作品も、堂々と正面から密室殺人を扱っています。最後に解き明かされる謎は、読者の意表を付くシンプルなものです。しかし、天城のこのトリックと比べると作為の感じが否めません。是非、一読して、その評価を聞きたいところです。惜しむらくは、この作品は一般には出版されていないことです。残念というほかはありません。